

音読

短歌のリズムを感じ取りながら
音読や暗唱をしましょう

年

名前

短歌2 (平安時代〜江戸時代)

短歌2で音読するのは、平安時代から江戸時代に

作られた短歌です。情景や、歌に込めた思いなどを思い浮かべたり、リズムを感じ取ったりしながら読みましょう。

秋来ぬと 目にはさやかに 見えねども

風の音にぞ おどろかれぬる (藤原俊行)

秋がやってきたと、目にはまだはつきりとは見えなくても、ふと耳にした風の音に、秋が来たことに、ふいに気づかされる。(平安時代によまれた歌)

ひさかたの 光のどけき 春の日に

しづ心なく 花の散るらむ (紀友則)

日の光がやわらかく、のどかな春の日であるというのに、しづ心で桜の花は、こんなにも落ち着かずに散っていくのだろうか。(平安時代によまれた歌)

大海の 磯もとどろに 寄する波

割れてくだけで さけて散るかも (源実朝)

大海の岩の多い海岸に、すさまじい勢いで波が打ち寄せている。激しく岩にぶつかり、割れて大きな音を出し、くだけ散っていつている。(鎌倉時代によまれた歌)

しきしまの やまと心を 人とはば

朝日にほふ 山ぞくら花 (本居宣長)

やまと心とはびびりうものかと、人がたずねたならば、それは、朝日に美しく光り輝く、山桜の花のようなものであると答えよう。(江戸時代によまれた歌)

読んだ回数	() で囲む	
	11	1
12	12	2
	13	3
14	14	4
	15	5
16	16	6
	17	7
18	18	8
	19	9
20	20	10

先生の評価	()	よい姿勢	すらすら読む	短歌の暗唱	意味が言える
私の評価	()				

() () () () () ()

